

ぼうさい通信 Vol.18



平成 31 年 1 月 16 日発行
熊本県立湧心館高等学校

テーマ — 防災時の心のケア —

「心のケアが避難所で拒否されている。」



こんな話を被災地の医師から聞いた。5 月半ば、突然の電話に、看護師の阿部幸子さん（53）は耳を疑った。岩手県赤十字こころのケアセンター統括として、避難所に「日赤こころのケアチーム」を派遣しているが、現場の保健師が、「避難所では『心のケア』と名乗らないで」と言ってきたのだ。「何かご迷惑でも……」。心配して尋ねると、保健師はこう説明してくれた。「心のケアと掲げる

色々なチームが避難所を訪れ、被災者に質問するので、被災者が辟易（へきえき）して、他の避難所に移りたいと言うのです」確かに5月初めの週末、ある避難所では、精神科医、看護師、心理カウンセラーなど専門職のチーム、市民ボランティアなど、十数のチームが、心のケアと書かれた札や腕章をつけて被災者を訪れ、活動していた。4月に宮城県南三陸町の避難所で会った79歳の女性を思い出した。津波で娘を失ったつらさを私に、「誰でもいいから聞いて、という思いと、そっとしておいて、という気持ちが行き来するの」と訴えていたのだ。岩手県内の避難所を歩いた看護師出身の衆議院議員、山崎摩耶さん（64）は「心と言えば、精神科と思う人も多い。でも、何より気になるのは、心のケア『してあげる』というおごった姿勢。ケアは傍らに寄り添って行うものです」と指摘する。



「心のケア」は、1995年の阪神大震災後、被災者の心理的支援の必要性を叫ぶ言葉として登場した。復興過程では心的外傷後ストレス障害（PTSD）専門施設、「兵庫県こころのケアセンター」ができた。初代所長の精神科医、中井久夫さんを神戸に訪ねた。避難所の話の中井さんは「心のケアは、そうやって何かするというものではない」という。「神戸では、被災者の心のケアを、一人にしない、体験を分かち合う、生活再建、の3段階で考えました。今回『寄り添う』という言葉が聞かれますが、その通りです。震災後、100日くらいで被災者の向き合う相手は自然から人間に移り、苦痛の



質も変わってきます。まさに今からです。」隣人として患者に接する医師など、寄り添う姿は今回の取材でも心に残る。被災者の怒りが人に向き始めてきたこともうなずける。

心のケア——その意味は必ずしも明らかにはならなかったが、被災者の苦しみに思いを重ねることから始まるのだと思う。